

—我孫子の景観を育てる会—

# 景観あびこ

## 「景観あびこ」発行にあたって

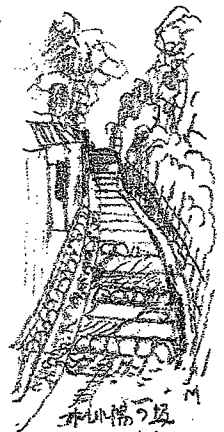
我孫子の景観を育てる会会長 佐多 英昭

「我孫子の景観を育てる会」は、景観づくり市民講座を受講した仲間が、我孫子の景観を誇れるようにしようではないか、と云うことで、平成13年6月に発足しました。同年7月には、市の景観条例に定める景観づくり市民団体の認定もいただき、活動しています。

我孫子市では、新しい市の景観づくりに取り組んでいて、まちなみウォッチングやあびこ景観マップ、景観シンポジウム、景観賞、景観づくり市民講座などの事業を行っています。

「景観あびこ」は、市民の立場で、景観を見つめて、育てる会の活動や様々の情報を発信してまいります。

景観づくりの取り組みは、市民、事業者、行政が一体となって進めていかなければなりません。関係者と一緒になって、これからの我孫子の景観づくりを始めようではありませんか。皆んなのまち我孫子を魅力ある景観のまちに育つよう活動してまいります。ご支援のほどよろしくお願いいたします。



## 平成14年度総会のお知らせ

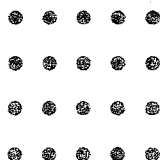
日時 平成14年4月20日(土) 10時～12時

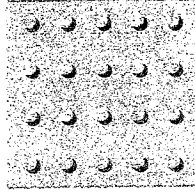
場所 我孫子市役所分館2階大会議室

「我孫子の景観を育てる会」が昨年発足して2回目の総会を迎えることができました。全員で景観を考え学習してきましたが、昨年12月より6つの部会で活動しています。広報部会、歴史会、部会「グループF」、デザインクラブ、街並班、環境美化です。活動内容は次頁に各部会長からお知らせします。また広報部会が初めての会報「景観あびこ」を作成しました。入会をご希望の方、ご興味のある方、ぜひ総会にご参加ください。

### 目次：

「景観あびこ」発行にあたって	1
平成14年度総会のお知らせ	1
歴史会	2
部会「グループF」	2
デザインクラブ	2
街並班	3
環境美化	3
インタビュー	4





## 歴史会

梅津一晴

我孫子を安住の地とした先人達は手賀沼や利根川と共に生き、その自然景観に対しては畏敬の念を抱きつつ心の安らぎを授かって来たことでしょう。

最近のNHKテレビによると、源氏物語絵巻、和歌をとらして、当時の人たちが自然にいかにおもひ寄せられ、いかに対話していたかが理解されます。私たちの父や祖父も同じように生きてきたと思います。

今の私たちの生活はどうでしょうか？現代の文明は確かに生活を豊かにしてくれまし

た。しかし、人類の歴史は20万年と言われますが、戦後のたった30年余りの時間で、私達は自然を自分達にだけ都合のよい様に変えてしまいました。我孫子も、緑豊かな丘陵は殆ど壊滅し残る緑地は病弱で貧弱な林であり、手賀沼は日本一に汚染されました。この時代に生きる市民として、この人類史の大罪を認識し、先人の歴史を学びながら、自然を大切にしたい我孫子の景観を皆で考えたいものです。

## 部会「グループF」

吉澤淳一

我孫子の地形の特徴である、台地（及びその周辺）と景観の関係を多角的に考察します。

その中で、「優れた景観を発見し、それを市民の文化的な共有財産として愛しみ育み、広く市民の間に景観を大切にするムーブメントを起こす」事をこの部会の主目的とします。

テーマは、当面次の三つに設定しました。

1) 斜面 斜面林 坂道 湧水等

2) ビューポイント 遠景 近景 俯瞰 仰瞰等

3) 森林 市民の森 緑地 屋敷林 雑木林 生垣等

会員は、自己の景観感、興味、意欲に基き、好きなテーマを選び、自由に活動します。

活動はフィールドワーク（野外研究）を主とします。

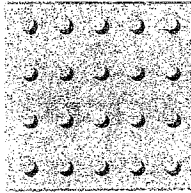
この活動によって今後、市の生活環境図集に景観の頁が加わったり、景観賞の応募促進に寄与したり、広く市民の関心を喚起していきたい。

## デザインクラブ

藪崎英夫

我々の部会は構造物（建築、看板など）と色彩が主なテーマである。色には、自然色と人工色がある。人工色は耐用年数が長く、不変理的である反面、変化のない均一化した色調の空間を作ることになる。長い歴史の中で、人は自然と同化し生活していた。その中で微かな生活環境の変化を喜び、また感動を見出した。しかし現在日本の都市の中で私たちのこのような感情を芽生えさせることは難しくなっているのも事実

である。かつての古い建築物などに備わっている、景観的調和を、現代の建築物に見出すことが難しい理由は何であろうか。そこで、我々の1年目の活動としては、構造物と周辺環境との景観的な調和について、色彩と形の両側面から調査を進めていき、理想の建築像の構築を目指すつもりである。また、その調査結果から、『景観としての建築の見方ガイド』を作成する予定である。



## 街並班

高野 瀨 恒吉

「景観」は人が発見し、人が創出したものを人が評価して選択したものであるとする。

人の感性から作り出す伝統工芸、美術芸術のすべてが古きものの上に新しきものを取り込んで、その時の人は共感を得て現在に活る、そして未来へと引継がれるものとするならば、「景観」も自然美の中に人工美が共存して醸し出す環境が、見る人の主観に相違があっても、夫々の人がそれぞれに受け止めて心を癒すものとして存在し、次世代に引き継がれる無常にして永遠のものである。

即ち、人があっての景観であることが前提である。従って、私達には古き時代

の人が感じた景観、新しき人が感じる景観の現実を踏まえて未来に人が感じるであろう景観の発掘を課題とする。言葉を変えて言うとなれば「無限に広がる空間に、懐しさと新鮮さが自然と混ざり合って存在し、人の感動を呼ぶ構図」を想像し、それを追求しようとするものである。

私達が他所を訪れた時受ける印象は『街並みと道路のたたずまい』に始まり、そこから地域の人情を感じとるものです。美醜はともかくとして築かれた造形が風土に根づいた景観として捕らえられるのです。我孫子の街並みや道路も当然『我孫子の風土を背景にした特質のある景観』として築かれなければならないものと思います。

## 環境美化

坂本 貴

活動を通じ、行政、住民、各団体（企業）とのコミュニケーションを図り、「環境・ゴミ問題」を一緒に取りくみます。

またその「土地」に棲む、動植物（生態系）の復元、保全に努め、後世に貴重な我孫子の遺伝子を残し伝える。

### 活動計画

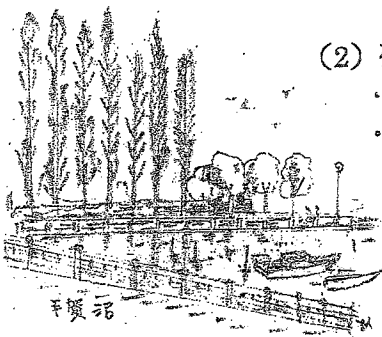
- (1) ゴミ問題対策
  - ・不法投棄の解決
  - ・「会」の活動の際に出るゴミの適正処理
- (2) 研究・推進、啓発活動
  - ・ゴミの減量について
  - ・不法投棄の問題（対処法）

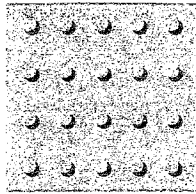
- ・法律
- ・「セミナー」などに参加
- ・各団体とのコミュニケーション

### (3) 植物を植える。

### 活動の状況

3月19日 2時より「タイヤの不法投棄」処理開始。3時終了。4人で、40本ぐらい処理した。クリーンセンター担当、田村係長。その後、少々ゴミ拾い。そこだけ綺麗になりました。「環境美化部会」坂本 斎藤 「クリーンセンター」田村 その他1名（名前がわからない）





## 『景観を守る人々』～インタビュー～ 第1回 三樹荘主・村山祥峰さん

### インタビュー

第1回のインタビューは、我孫子の景観を代表する三樹荘主の村山祥峰さんにご登場いただいた。荘前の天神坂は昨年第5回景観賞を受賞された。3月2日、私たち3人と約2時間、昨年米寿を迎えられたとはとても思えぬ若々しい村山さんに、貴重なお話を伺うことができた。(広報担当、富樫・織田・清水)

——このたびは景観賞を受賞されておめでとうございます。今日は天神坂だけでなく、三樹荘を含めてお話をお伺いしたいのですが、まずここに住まわりたいきさつからお聞かせください。

昭和15年、手賀沼のほとりを歩いていて、今のタバコ屋のあたりから坂を登ってみた。あたりには1軒の家もない。大変急な坂で、Yの字に掘れていた。上に着いて右側の竹林の中に別荘らしきものがあった。後で嘉納治五郎のものとなつたのだが、その向かいに空家があって木戸が空いている。何度呼んでも返事がない。入ってみて、素晴らしい景色に圧倒されてたずんだ。当時の私の夢は広い土地に果樹や花を植えて、晴耕雨読の老後を過ごすことでした。ここでその人生設計ができると思った。わずか600坪しかないこの庭でも風景があれば10万坪にもなると妻に言われて心は決まった。当時不動産屋などなかったが、土地のことを知る川原さんに、その意を伝えておいた。

昭和16年、大東亜戦争に突入。荒木大将が文部大臣になって、それまで兵役免除だった教員も応召されるようになった。当然、教員である私もその中に入れられた。幸い内地勤務だったので3～4年で帰ることができた。軍隊の生活は官費だったので、教員の給料は手付かずで全額残っていた。東京での生活が始まって、葛飾で、土地100坪家50坪を100円で買った。10年経ってインフレで60万で売れた。そこで小岩に150万の家を買って、庭でも作って落ち着くつもりだった。丁度そのころ(昭和27年)、忘れていた我孫子の川原さんから、勤め先の学校に電話があった。出かけてみると、あの景色のいい、三本の椎の樹のある庭のある家だった。350万で売るといふ。銀行に相談すると土地・家を担保に入れて300万が限度だといふ。土地の持ち主は昔、日本海軍で東郷元帥の副官だった谷口海軍大将。のち、海軍の軍令部総長などを歴任された偉い人。その息子さんが交渉の相手で、終戦の時は海軍大佐だったようです。金を捻出するのに苦労しているのを

見かねてか、300万に負けてくれました。その後ここはそのまま15年ぐら修理もしないで空家にしておきました。そして我孫子は昭和45年、人口4万9千人の市になり、私はこのときここに住むことになった。

——我孫子も変わりましたが、ここ三樹荘の景観も変わりましたね。

昔の風景は今ありません。25年前の姿を求めても無理です。目の前には大きな生涯学習センターが出来てしまった。三本の巨木の間から見えていた手賀沼も完全にさげられてしまい、10万坪の借景もなくなってしまった。建築にあたって市役所はタイルの色やデザインについて気を使いながら相談には来てくれたが、それは空しいこと。屋上に芝を植えたり、植栽をするというが、もとの景色がもどるわけではない。

——これからの三樹荘をどう維持されるおつもりですか。

こんなに金のかかるものは子供達も要らないという。子供達は私が死ぬまでここにいなさいというが、市に寄付するか、売るかして別の所に行きますよ。

——景観賞になった坂にはどんな由来がありますか。

急な坂で雨が降ると滝のように水が流れる。土が掘れる。この坂は私の土地の中の私道だと思っていたので、筑波の山荘にある石を運んで坂に土と石で石段を作った。ところがおばあさんが石につまずいて転び怪我をしてしまった。直さなくてはと考えると、この坂は私道ではなく、市が管理する公道であることが分かった。当時の大井市長に相談して、『ふるさと創生』の予算で今の石段の坂に造りかえてもらった。もちろん私の意志と坂に対する思いを反映してもらったつもりです。天神坂というのは、ここに天神様が祭られていたのです。樹齢400年という三本の椎の木が御神木だった。最近、ここから天神様のもと思われる鈴が見つかった。300年位前の銅製です。10坪位の神社があったのでしよう。

——坂の掃除も大変でしょう。

家のものがやっていますが、この頃はシルバーセンターに頼んでいます。1時間千円ですから容易ではありません。多い時には3日に1回頼まなければなりません。隣の井手口さんの側の竹林の手入れも大変です。景観賞が泣かないようにしなければならぬ。

《インタビューを終わって》は次号で報告します。

